The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	太平記読と近世初期文芸について ： 「太平記」の享受から
Author(s)	大橋, 正叔
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1972, 5, p. 1-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47736
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

太平記読と近世初期文芸について

――「太平記」の享受から――

大橋正叔

はじめに

この小稿では、『太平記』の享受を太平記読の姿を通じて捉え、又、近世初期文芸に現われた『太平記』の影響を指摘し、その間にある問題を考え、近世初期文芸の様相をみる為の一視点を導びき出そうと試みるものである。『太平記』が多くの文芸に影響を与えてきたことは後藤丹治博士の詳細な御研究[1]をはじめ種々の論考があり衆知のことであるが、時代と共に様相を変えていった文芸にとってはその受用のしかたに変化がみれる。戦国乱世を経て世の中は偃武に変りいく中で、一先行文芸の享受を通して時代の嗜好が投影された文芸の姿をみようと思う。

一　太平記読について

近世初期の『太平記』の盛んな享受を証するものとして太平記読がある。太平記読については亀田純一郎氏の御考察があり[2]、氏によれば「太平記読」なる名称は武士階級相手の理尽抄（太平記評判秘伝理尽抄）講釈と庶民相手の仕

方話を以て語られる太平記講釈の二つを意味して用いられており、両者の境界は必ずしも明瞭ではないが太平記読なる名称は後者に名付けたものであろうとされている。そして、「前者は慶長元和の頃から元禄宝永頃若くはそれ以後に及んで居り、後者は貞享元禄を多く溯らぬ頃から宝永正徳若くはそれ以後にまで行はれてゐたと考へられる」と述べておられる。右の亀田氏の御見解によって太平記読の概要は伝えられているが、ここでは『太平記』が歴史的にどのように読まれていたかを述べ太平記読について考察してみよう。

（一）近世以前

『太平記』が四十巻本の形態をなしたのは応安四年（一三七一～一三七二）頃と推定されているが、「洞院公定日次記」応安七年（一三七四）五月三日の条に

伝聞去廿八九日之間小嶋法師円寂云々、是近日翫天下太平記作者也　凡雖為卑賤之器有名匠聞可謂無念　（傍点筆者）

とあり、成立後よく読まれていたことは以後の公家日記や文書にその名がみえ、又、多くの写本、多種の版本等の存在から窺うことができる。しかし、その読まれ方は読み手の立場によって異なり微妙な反応を呈している。応永九年（一四〇二）に今川了俊は『難太平記』を表わし

此記の作者は宮方深重の者にて。無案内にて如レ此書たるにや。寔に尾籠のいたりなり。尤切出さるべきをや。すべて此太平記事あやまりも空ごともおほきにや。昔等持寺にて法勝寺の恵珍上人此記を先三十余巻持参し給ひて錦小路殿（筆者注　足利直義）の御目にかけられしを。玄恵法印によませられしに。おほく悪ことも誤も有しかば。仰に云。是は且見及ぶ中にも以の外ちがひめおほし。追て書入。又切出すべき事等有。其程不レ可レ有二外聞一之由仰有し。後に中絶也。近代重て書続けり。次でに入筆共を多所望してかかせければ。人高名数をしらず書り。さるから随分高名の人々も且勢ぞろへ計に書入たるもあり。一向略したるも有にや

（『群書類従』第十三輯合戦部所収）

と『太平記』の成立事情を述べその信憑性を批難している。了俊にとって『太平記』の記事は自家の名誉を傷つけるだけでなく、足利幕府を誹謗し史実を歪曲するものと思えたのであろう。

又イ
まさしく錦小路殿の御所にて玄恵法印読て。其代の事どもむねとかの法勝寺上人の見聞給ひしにだに。如此悪言有しかば。唯
をさへて難じ申にあらず　（同　右）

と重ねて述べ了俊のみの意見でないことを強調している。これは史書としての『太平記』の読み方であり、そこには史実の忠実な記録性と南北朝の抗争に対する史観が絡むという問題を投げかけているが、公家間での『太平記』の読み方にはこれ程の深刻さはない。「看聞御記」永享八年（一四三六）五月六日の条では

太平記第一予読。女中聴聞。重仲候

と後崇光院が近侍の女房に『太平記』を読み聞かせておられ、翌七日には双六に興じた後『太平記』が読まれている。このように『太平記』が読まれることは同記の応永二十三年（一四一六）六月廿八日の記事の

大光明寺客僧有物語上手云々。自長老被挙申之間被召之。酒宴御肴語之。凡弁舌吐玉。言詞散花。聴衆感歎断レ腸。

や、同七月三日の「先日物語僧又被召語之。山名奥州謀反事一部語之。有其興」といった記事からみると、他の戦記物語（この場合『明徳記』が語られている）が語られるのを聞き楽しむのとは又異なるようである。「実隆公記」文明十七年（一四八五）十月十五日から十一月廿八日にかけての記事では、後土御門天皇の仰せで実隆達が『太平記』巻十二・巻十三の書写校合をなしている。さらに同記延徳二年（一四九〇）五月十七日、六月六日、八月十四日、十一月三日の記事では『太平記』巻九迄天皇に読み申し上げている。しかも、実隆達が書写校合をなした『太平記』巻十二・十三は建武中興の時期を叙述しており、大内裏造営や藤房の諫言、恩賞への不満から武家の離反、護良親王の

剛腹とその薨御、天皇親政の崩壊から足利氏抬頭の経過を扱い朝廷公家に関係深い巻である。後土御門天皇が書写校合を命じた意図が推し測れよう。『太平記』はこの観点からは朝廷公家において尊重された書といえよう。一方、「蔭涼軒日録」にみえる江見河原入道（文正元年（一四六六）閏二月六日、七日の記事）のように湯治場で客の慰みに『太平記』を読む専業者[3]の存在が認められ、他の戦記物語が語られるのと差違のないものもあった。又、「後法興院記」文正元年（一四六六）五月廿六日の記事には

向成仏寺聴聞談儀 法華経 次読太平記禅僧也

と法文談義に続いて『太平記』が禅僧によって読まれている。こういった記事から『太平記』の享受形態には『西源院本太平記』（S18刊　刀江書院）の解説で鷲尾順敬博士が「西源院本太平記巻十二綱目『兵部卿親王事』の下に、『読物』ありと註せるは、本書が亦朗唱せらし一証と見るを得べし」と述べられ、又、桑田忠親氏が「『太平記』の古写本には、『二重』『三重』などの符号のついているものがあり、はやくからこれが節づけられた証拠であろう」[4]と述べておられる物読み法師（江見河原入道）物語僧（「後法興院記」）の朗唱による慰み的な享受と、「実隆公記」にみられる記事や「経覚私要鈔」「親長卿記」「言継卿記」等にみられる書写などの積極的な享受があった。そして、両者に共通していえることは「後法興院記」の記事から察せられるように『太平記』が当時における幅広い歴史書教養書的な意味合をもって享受されているということである。

（二）近世以後

このような『太平記』の享受のあり方は近世においても本質的には異ならなかった。戦国武将が『太平記』を好んで読んでいたことは島津家の武将上井覚兼の「伊勢守日記」にみられ、覚兼自身が座衆に『太平記』を読み聴かすな

どその愛読ぶりが窺える。又、『参考太平記』の校合に用いられた今川家本・島津家本・毛利家本・北条家本の存在や、亀田氏が御紹介されている[2]備前池田家・加賀前田家での愛読ぶりなど、戦国武将やその後裔と『太平記』との強い結び付きを示している。そして、江戸時代に入るとこのような上層武士だけでなく下級武士や町人達の間にも『太平記』は浸透し享受されていく。

松永貞徳の『戴恩記』に

道春初而論語の新註をよみ、宗務太平記をよみ、丸にも歌書をよめと、下京の友達どもすすめしにより、なにの思案もなく、百人一首・つれ〴〵草を、人の発起もなきに、群集のなかにて、大事の名目などをよみちらし侍りけるを、きこしめしつけさせ、陰にて御にくみ有けるとかや

（岩波書店刊日本古典文学大系）

とあり、松永貞徳の『つれづれ草』、林道春の『論語新註』の講釈と共に宗務が『太平記』を読んでいる。なおこの場合読むは単に朗唱するだけでなく音義や内容の講釈を伴っていただろうことは、貞徳の記述から推察できる。慶安五年（一六五二）貞徳自跋のある『なぐさみ草』にもこれと同記事があり、道春の『論語新註』の講義からこの事件は慶長八九年（一六〇三～一六〇四）頃であろうと小高敏郎氏は考証されている。[6]宗務については遠藤宗務法橋と『なぐさみ草』にあり、『羅山先生詩集』巻十五に「以レ医為レ業初在レ京後住二江戸一」とあるが詳細は不明で今後の考証を必要とするが、[7]これなど当時一流の文壇人によるそれなりの教養人や道に志す人達への公開講義のようなものと考えられ群集といっても庶民大衆ではあるまい。だが、多人数を前にしてなされた太平記講釈を語る江戸期における最も早い確実な記録である。新井白石の『折たく柴の記』にも

戸部の家人に富田とて、生国は加賀国の人と聞えしが、太平記の評判といふ事を伝へて、其事を講ずるあり。はじめは小右衛門

某といふ。後には覚信といひし人也。夜ごとに我父など寄合ひつつ、其事を講ぜしめらる。（岩波書店刊日本古典文学大系）

とあり、万治三四年（一六六〇～一六六一）頃上総国久留里藩土屋家の家臣達が自邸で加賀国（小松黄門前田利常〈一五九三～一六五八〉を中心に理尽抄講釈盛行の地）に縁ある者に理尽抄を講じて貰っている。富田小右衛門覚信は日置昌一氏の『日本系譜綜覧』（S11刊 改造社）には太平記流軍学の二代目となっており、理尽抄講釈が武士達にとって軍書講釈であったことが理解できよう。そして、このように『太平記』が広く読まれるようになっていく背後には、江戸時代になって一層発展を遂げた印刷術や出版機構が多きな影響を及ぼしていることを見過すことはできない。冨春堂五十川了庵によって慶長八年（一六〇三）刊記片仮名交り十二行古活字本が刊行されて以来、整版術が開発されるとすぐさま元和八年（一六二二）に杉田良庵によって刊行されるといったように、実に多種の版本が出版されており『太平記』が如何に求められていた書であるかがわかる。それに伴い『太平記』の末書の出版も並行し盛んになっていく。寛文六年（一六六六）刊行の「和漢書籍目録」軍書の部では十二種であったものが、寛文十年刊「増補書籍目録」では十六種、元禄五年（一六九二）刊「広益書籍目録」では三十一種と増加の一途をたどる。これらは雑書ながら仮名草子『身の鏡』『理非鑑』の作者日州漂泊野人江島為信が『闕疑兵庫記』に初めて署名していることから、『太平記』に関係したこれら末書を正すことが正統な学として認められていたことを示唆すると共に、『太平記』を中心とした軍学の盛んであった様子が窺える。このような理尽抄講釈も戦国乱世を体験した武将や武士達の時代から遠去かるにつれて次第に衰微していく様子は、『太平記神田本』添付の「覚」に

光政公（筆者注 備前岡山藩主 池田光政）不佞半分ホト被レ成二御聴一候、養元（同 理尽抄講釈相伝者 自得子養元）ニ二返半御聴候故、肝要之所能御覚候間、随分念ヲ入講談仕候ヘト被レ仰候、池田信州公（光政公二男 池田政言）、三分一ホト、同丹

州公（光政公三男　池田輝録）少々御聴候

とありその熱意の後退を思わせる。他方、史書として『太平記』は水戸光圀編纂の『参考太平記』（元禄四年　一六九一刊）の成立に象徴されるように高く評価され尊重されるが、それは理尽抄講釈の介入し得えない所でなされていた。

これらに対し、庶民対象の太平記読は『人倫訓蒙図彙』（元禄三年刊）に

近世よりはじまれり太平記よみての物もらひあはれむかしは畳の上にもくらしたればこそつつりよみにもすれなまなかかくてあれよかし祇園の涼糺の森の下などにてはむしろしきて座をしめ講尺こそおこりならめそれを又こくびかたふけて聞ゐる者もありとかく生類ほと品々あるはなかるべし

とあるような、すりきり浪人による勧進読であったのであろう。「大経師昔暦」の梅龍は

国本では人並に武士の真似をして、鉢坊主の手の内程米を取った　（中之巻）

者であり、『浮世親仁形気』の父親は

若き時分西国方に武士奉公つとめしが、（中略）侍奉公ならず、（中略）けふをくらしかねて、無念ながら北野の御縁日に出て太平記をよみ、又は楊枝耳かきのつきつけ売して喰はぬ日も多かりし　（巻一ノ三）

と書かれているように、零落武士の糊口を凌ぐ手段として街頭で『太平記』を読み語ったのが最初の姿であったのであろう。講釈師の名は『難波すすめ』（延宝七年　一六七九　刊）に見えるが、彼らが『太平記』を語ったかどうかは不明である。西鶴作品には天神の甫水、（『難波の白は伊勢の白粉』『武家義理物語』）、道久（『好色一代女』）といった太平記読の名はみえるが、彼らも四条河原に立った太平記の辻談義、読売（『松の落葉』、『傾城仕送大臣』巻六ノ三、『好色産毛』巻

之三）の者達も、零落武士のいつしか定着した姿であったと思われる。そして、専門講釈師のような仕方語をもって語られる楠湊川合戦（「大経師昔暦」）、塩冶判官（『元禄曽我物語』）といった話などが庶民の興味と関心を集めたのであろう。『近代世事談』（享保十八年 一七三三 刊）には「太平記読」について

江戸にては、見付の清左衛門と云者始也。年来浅草御門傍に出て、太平記を講ず。此ものは理尽抄と云太平記の評判の書を以て講尺せり。又その頃赤松清龍軒といふ者、堺町に芝居をかまへ、原昌元と名乗て軍談を講ず。京都にては原永惕といふ者世に鳴

（『日本随筆大成』第二期第六巻所収）

とあり、この記事は元禄十三年の有様といわれている（『節信雑誌』〈『古事類苑』楽舞部二十三〉）。この人達はむしろ専門講釈師の姿を髣髴させるもので『太平記』の他、『つれづれ草』や他の軍談などをも語ったものと思われる。只、町講釈師を太平記読という呼称で代表させている限り、その当初は『瀬田問答』に「今ノ講釈師ヲ、ムカシハ太平記読ト申テ太平記古戦物語ヲノミ講釈イタシ候」とあるように、『太平記』のみを講釈した者の存在を考えてみたく思う。そして、仮説ではあるが、その出発を『人倫訓蒙図彙』に記載されている者達に求め、一時的な糊口の業以上のものでないと考えたい。そして、一方では専門講釈師の抬頭が門附芸のそのような者達をも吸収し他の軍書講談と劃しえない太平記読をつくりあげていったものと思われる。太平記読が『太平記』を庶民の間に宣伝していったことは事実であるが、元禄末頃は軍談講釈に吸収され、滝沢馬琴が「昔ありて今はなきもの」（『燕石雑誌』）に数えあげたように、やがて、その勧進読の姿も人々から遠いものになる。

二　『太平記』と近世初期文芸

『太平記』が成立以来多くの人達に読み親しまれてきたことは前述の通りである。特に江戸時代に入ってからは一躍その享受層を拡大していったが、『太平記』と他の文芸との関係をみるにいくつかの問題を見出すことができる。以下その問題について私見を述べてみよう。

（一）謡曲と『太平記』

磐城平の城主内藤風虎（一六一九～一六八五）の蔵書印をもつ江戸時代初期に編纂[10]された『新謡曲百番』には、『太平記』中の最も中心的な事件や人物が取り上げられ曲目化されており、古曲とはかなり異った謡曲の曲目傾向をみることができる。古曲で題材を『太平記』に求めている曲は、『平家物語』『源平盛衰記』『曽我物語』『義経記』等の源平曽我物に比べて極めて少ない。『太平記』と直接の関係をみれるのは「壇風」（『太平記』巻第二長崎新左衛門尉意見事付阿新丸殿事）「白髭」（同巻第十八比叡山開闢事）の二曲であり、他に北条時頼の廻国伝説（同巻第三十五北野通夜物語付青砥左衛門事）から素材を得たと考えられる「鉢木」「藤栄」がある。なお佐成謙太郎氏は「嵐山」「舎利」「歌占」と『太平記』との関係を指摘されている。[11]これらの曲の中で『太平記』を強く意識させるのは「壇風」である。隠謀露見し佐渡に流された父日野中納言資朝を訪ねいく阿新丸の説話が、佐渡に配流された世阿弥の感懐を深く誘ったのであろうか、この曲は世阿弥作と伝えられている。[12]「壇風」が『太平記』をかなり忠実にとり曲目化されているに比して、他の曲は北条氏の滅亡から動乱の南北朝時代への展開の中で、戦火と共に繰り広げられた権勢欲に基づく人間の喜怒哀楽、動揺する歴史に批判の目を向けた『太平記』の描く世界とは離れた所で『太平記』の一部を素材に利用しているに過ぎない。だが、『新謡曲百番』になると田中允氏が「古謡曲の軍記物に取材したものに於いては、義経記物・曽我物が平家物に次いで多いのであるが、新謡曲百番になると、これらはその数を減じ、代って太平記物

が急増している」と述べられ『太平記』の影響曲として「許由」「大塔宮」「大内裏」「湊川」「幽霊楠」「大森彦七」「小夜衣」「思出川」「義興」「現在千万」「恋妻」「文覚滝籠」「現在道成寺」の十三番をあげておられるように[13]『太平記』との関係が濃くなってくる。これらの曲のうち「大塔宮」（『太平記』巻第五大塔宮熊野落）「大内裏」（同巻第十二大内裏造営事付聖廟御事）「湊川」（同巻第十六正成下向兵庫事）「幽霊楠」（同巻第十六正成兄弟討死事）「小夜衣」（同巻第二十一塩冶判官讒死事）「大森彦七」（同巻第二十三大森彦七事）「思出川」（同巻第三十三飢人投身事）「義興」（同巻第三十三新田左兵衛佐義興自害事）などは『太平記』中で好まれ読まれた個所であり、「大塔宮」「大内裏」「大森彦七」「思出川」は『太平記』（慶長八年刊〈岩波書店刊古典文学大系底本〉）の詞章と対校してみるに多くその詞章をそのまま流用している。このような太平記物の急増は田中允氏が翻刻を続けておられる『未刊謡曲集』（古典文庫刊）にも顕著に現われており「楠（一）」「正成（二）」「大森正成（八）」「楠塚（九）」「楠正成（九）」「杉本楠（十一）」（曲名下の和数字は『未刊謡曲集』の冊名を示す）といった楠木物の他に「佐和（五）」（『太平記』巻第二十八三角入道謀叛事）「篠村願書（五）」（同巻第九足利殿着御篠村則国人馳参事・高氏被籠願書於篠村八幡宮事）「花宴（六）」（同巻第二十三大森彦七事）「童堂（三）」（同巻第十七山攻事付日吉神託事）「忠顕（六）」（同巻第七先帝船上臨幸事）「名古屋（六）」（同巻第九山崎攻事付久我畷合戦事）「笠置山（九）」（同巻第三笠置軍事付陶山小見山夜討事）「賀名生（九）」（同巻第十八先帝潜幸芳野事同巻二十一先帝崩御事同巻第二十六正行参吉野事）「梶井宮（九）」（同巻第三十持明院吉野遷幸事付梶井宮事）「熊（九）」（同巻第二十八三角入道謀叛事）「勾当内侍（十一）」（同巻第二十義貞首懸獄門事付勾当内侍事）、さらには千種忠顕をワキにした「芳野御幸（七）」などの曲名があげられる。そして、これらの曲は『新謡曲百番』所収曲と共に、解題で田中允氏が述べておられるように室町末期から江戸初期に創作されたものが多いと思われる。

永正十三年（一五一六）頃成立と推定される[14]『自家伝抄』に「秦武文」「楠木」の名がみえることからも謡曲における太平記物は室町末期頃から流行しだしたことは否めない。古曲で取り上げられることが稀であった太平記物が一時期から急に流行しだした意味はどのように考えることができるであろうか。古曲に太平記物が少ない理由として佐成謙太郎氏は「徳川時代の浄瑠璃、歌舞伎と同様、室町時代の謡曲も生々しい近代史を材料とすることを憚ったのであろう」（『謡曲大観』〔壇風〕解説）と推測されているが、「壇風」は『太平記』の筋に忠実に作曲されており佐成氏の見解は一応首肯し得るものの強力な幕藩体制下の徳川時代の浄瑠璃歌舞伎からの類推では説明できない面も考えられる。古曲では、『平家物語』に題材を求めた平家物が最も流行していたという事実がある。平曲の盛期であり、そのような好材料を持ちながら『太平記』に題材を求める必要もなかったと思われる。何故なら、『太平記』は政治権力の行先を看つめ流動の時代を批判的に叙述した固苦しい、評価の不安定な準歴史書である。又、足利幕府の保護の下に発展し大成していった能楽である故、南朝方に好意的に書かれた『太平記』は「生々しい近代史」として足利幕府の保護下では「材料とすることを憚ったのであろう」。そして、『太平記』が謡曲の中に顕著に現われてくる理由には応仁の乱（一四六七）以後兵法家としていよいよ高まっていく楠木正成の声望と共に、政治上の実権が管領細川・畠山などの強力な守護大名の手に移り足利氏の勢力が衰えた点などが考えられる。『自家伝抄』に「秦武文」「楠木」の作者とされる金春禅鳳が、管領細川政元の庇護を得ていたことは、『太平記』を許容し得る立場の者と謡曲の結び付きを示唆するものといえよう。又、大村由己が新作謡「吉野詣」「高野詣」「明智討」「柴田討」「北条討」を作文し、秀吉が金春八郎に命じて仕舞をつけさせ、文禄三年（一五九四）三月十五日大坂城本丸で舞わせるなど[15]、自らの戦功を誇る戦乱に生きてきた者が楠木正成を身近かな英雄に数えても[16]不思議でなく、楠木物の流行などこの点から

も理解できよう。

（二）中世小説仮名草子と『太平記』

小説史の区分として「南北朝から江戸初期に至る間に制作せられた作品」を中世小説と市古貞次氏は規定されている。この期の小説が『太平記』から多くの題材や詞章を借用していることは諸氏の指摘[17]が既にあるが、その場合、『中書王物語』『北野通夜物語』『さよどろも付ゑんや物語』のように『太平記』からの転写或は剽窃とみえるような作品と、『秋夜長物語』『鳥部山物語』「俵藤太物語」『李娃物語』『鶴のさうし』『ほうらい物語』『はもち中将』『かくれざと』といった『太平記』から詞章を流用したり、筋の展開に際し『太平記』中の説話を潤色して用いる（『秋夜長物語』―『太平記』巻第十五三井寺合戦並当寺撞鐘事）ことはあっても『太平記』中の人物を登場させ南北朝の抗争を感じさせない作品との二種をみることができる。『俵藤太物語』で秀郷が時雨という女房を媒にして小宰相に艶書を送る段は『太平記』巻二十一塩冶判官讒死事からの流用であるとの後藤博士の指摘[18]があるが、俵藤太の将門征伐と『太平記』に描かれた時代との間に脈絡はない。『李娃物語』は『李娃伝』の翻案に際し「太平記巻十八一宮御息所の条から種々の材料と暗示とを得、また太平記巻一『儲王の御事』『無礼講の事』『立后の事』『後醍醐天皇御治世の事』などにもそれぞれ交渉を持つ。極言すれば李娃物語は李娃伝と太平記とを撮合して成立したものと謂ってもよい」[19]と後藤博士は述べておられるが、その内容は適宜『太平記』の美辞麗句と趣向を利用した『李娃伝』の翻案にとどまっている。『秋夜長物語』『鳥部山物語』は児物語、『はもち中将』『鶴のさうし』『ほうらい物語』『かくれざと』は流離譚・報恩譚・漂流譚・御伽草子的合戦譚が中核をなす物語であり、部分的着想のうえで『太平記』を連想させる点もあるが筋の展開や登場人物から『太平記』を直接感じさせる要素はほとんどない。後者の作品類を通じ

てこの読者達は『太平記』と類似の美辞麗句を耳に感じることはあっても『太平記』を思い浮かべる契機はないといってよかろう。史実にとらわれない私的な『太平記』の読まれ方が一方では中世小説の文辞着想に見捨てがたい影響を与えていた一証とみれる。

又、仮名草子にみられる『太平記』の影響作品として後藤博士は『薄雪物語』『小倉物語』『花の名残』『山路の露』『藍染川』の五作をあげそれらの関係を実証されている。[1]『太平記』の道行文をそのまま流用し京上りの地名が逆になる個所をもつ『露殿物語』もこれらの作品と同様で、同じ仮名草子の中でも構想や表現は、（無論近世の世相描写といった面もあるが）中世的性格の濃厚な作品で、[20]古典からの影響は『太平記』に限らず種々の古典から得ている。これらの作品と『太平記』との関係は前述の中世小説との間でみられた影響関係と類似の様相を示しているが、特異な点として、『薄雪物語』で衛門高野登りの文辞を『太平記』巻第二十二脇屋義助予州下向事の本文を丸取していると共に、薄雪の返書の一通に『太平記』巻第二十一塩冶判官讒死事をそのまま一説話として挿入するといった中世小説にみられた二種の傾向が融合した形で現われていることである。『薄雪物語』は『伊勢物語』をはじめ種々の古典や和歌を拠り所として艶書をなし、園部衛門と薄雪の贈答による書翰体小説を構成している作である。仮名草子の教訓啓蒙実用性からも『薄雪物語』に多くの古典が引用されることは不思議でなく、『太平記』の一条が取り上げられていることに特別な意味は見出せない。この『薄雪物語』と同材の「薄雪」が『新謡曲百番』に収められている。「薄雪」は、深草の里の園部右衛門が一条御所に仕える薄雪という女性を清水で見染め契りを結ぶが、忍び妻が露見し右衛門は闇討に会い命を落す。それを聞いた薄雪は自害するという筋で、薄雪をシテにした夢幻能三番目物である。『いろは作者註文』にみえる「薄雪」はこの曲をさすとされており、[21]『薄雪物語』で薄雪の病死後衛門は剃髪して後世を弔うという小説化された筋に比べると、「薄雪」は『恨の介』の素材とされる松平若狭守近次と禁裏女房の密通

事件や[22]慶長十四年の宮女密通事件との類似性から[23]『薄雪物語』より事実に近い内容を伝えているのではないかと思われる。「薄雪」と『薄雪物語』は、同一題材から文芸化された別種の二作品とみるべきで、両者の影響関係は内容のみからは求められない。只、謡曲の方は闇討や自害などにみれるように創作に当って近世的色彩を強く感じさせるが、物語は中世小説的性格を求めたとみることはできよう。そして、その中に『太平記』の一条を挿入することは、作者の嗜好という問題も残ろうが、『東海道名所記』の新田義貞の天龍川での勇将ぶりの紹介（巻三）や『名女情比』の二話（第四今出川公顕の息女一宮と御契の事、勾当内侍新田義貞にあひ初給ふ事）などと共に、『太平記』中の説話が興味の対象となり得る程、時代の好尚を得ていたといえよう。そして、これらの引用がいい意味での教訓としてとられていることに注目される。

（三）浄瑠璃と『太平記』

『東海道名所記』（万治二年 一六五九 頃成立）巻六に浅井了意は

喜太夫といふ者、上総の掾になりて太平記をかたる。その曲節（ふし）、平家とも舞とも謡とも知れぬ嶋者なり　（朝日古典全書本）

と書き残している。四条河原の景であるが、虎屋喜太夫が受領して上総少掾（『浄瑠璃太夫口宣案』では上総目）を名乗ったのは明暦四年（一六五八）七月十三日で喜太夫の京入りは明暦三年の江戸大火以前とされている。[24] 喜太夫の残存正本に太平記物はないが、この記事は明暦四年（万治元年）頃既に浄瑠璃で『太平記』関係の曲がとりあげられていたことを示している。「松平大和守日記」（若月保治著『近世初期国劇の研究』所収）万治四年（一六六一）二月十三日の条には説経や浄瑠璃の正本名が書きのせてある。それら正本名から『太平記』と関連しそうな名を取り出すと「太平記」「大森彦七」「相模入道」「高氏」「ごだいご」「太平記の中いろいろ」といった名があげられ、内容は不明な

がら『太平記』から取材されていたものが少くなかったと考えられる。『古浄瑠璃正本集第二』（横山重編角川書店刊）には万治頃刊行かとされる「後醍醐天皇」（仮題）が収められている。児島高徳の活躍を中心に『太平記』巻第九六波羅攻事迄の後醍醐天皇の動向を『太平記』に添ってまとめたもので、劇的構成や脚色上の工夫をみとめることはできない。又、同正本集第四所収の寛文九年刊「山名神南合戦」（奥書に天下一さつま小太夫同あぶらや権太夫無類正本とある）も、『太平記』巻第三十二山名右衛門佐為敵事から神南合戦事迄をまとめたもので、脚色上の工夫はみられない。なお江戸を中心に延宝頃から宝永四年頃迄活躍していた土佐少掾橘正勝の正本にも内容不明ながら「楠湊川」「大塔宮」といった『太平記』から取材したと思われる曲名がみえる（土佐少掾橘正勝正本「名古屋山三郎」巻頭附載六段目物目録による）。これらの曲が「大和守日記」記載の曲とどの程度重なるかは不明ながら、浄瑠璃に太平記物が進出している様子がわかり、然も早い時期のものは『太平記』にかなり忠実に作品を構成していることがわかる。正徳四年（一七一四）刊行の薩摩掾外記藤原直政（「山名神南合戦」梓行の天下一さつま小太夫と同人で前記の土佐掾とは相弟子といわれる人）正本に「出世太平記」（『新群書類従』所収）がある。新田義興の再興を仕組んだ曲であるが、その構成脚色は前記の二曲とは異なり道行鎧揃へなどを持ち浄瑠璃として洗練されている。やや時代が下って創作された曲のように思われる。

金平浄瑠璃「宇治の姫切」（明暦四年正月刊岡清兵衛作）の二段目に武蔵相模の国主本間入道が反逆したのを頼光が四天王と共に討伐に出かける、その間に中国五国の領主らいしんが京都へ攻め上ってくる内乱が書かれているのを和辻哲郎博士は取り上げ、「作者は、満仲頼光の時代の史実に関係なく、太平記の世界を使っている」[25]「ここに展開される争闘の目標は明かに政治的であって、その関心の持ち方はいかにも太平記によく似てゐるのである」[26]と述べられて

いる。万治寛文頃盛行した金平浄瑠璃の特徴の一つはその内容の荒唐無稽さの中に和辻博士が指摘されたように「公的な場面における争闘（政治的社会的な対立争闘）と闘争する男性」[27]が関心の対象として書かれている点をあげることができよう。このような特徴を持つ金平浄瑠璃が好まれた背景には、かって戦場を馳駆した勇者の残映のなおかつ脳裏から消え去らない者達が存在し働きかけていたものと思われる。『太平記神田本』にはこの写本の由来書と理尽抄講釈に関する秘伝書らしい「家珍草創太平記」「覚」の二巻が副えられている。一壺斎養元の述になる「覚」が理尽抄講釈の史料とされるが、この書の成立について亀田氏は「後者は何時の筆に係るか明記されていないが、文中に『今以相模守光仲公御所持ニテ候』とあるから、池田光仲（因伯二州の大守）の卒去せる元禄六年より以前なることが知られる」（前出論文）と考証されている。内容は備前岡山での理尽抄講釈の敷衍を述べているものであるが、そこに列挙されている池田氏の一人、備前宰相公池田忠雄が小松黄門前田利常から借用して筆写した理尽抄の所持者、相模守光仲（池田忠雄の子）は太平記物を自らの語り物に持っていた土佐少掾橘正勝を贔屓にし、「御在府御在国日記」「御祐筆日記」[28]といった芸能関係に貴重な資料を残した因幡鳥取藩主池田光仲である。近世初期、謡曲のみならず浄瑠璃や歌舞伎までを諸大名が愛好していたことは、松平直矩の「大和守日記」や池田光仲父子の行状を記した前述の日記等に窺われるが、これら芸能に関する記録をみるとそれは単に自分の好みのみによって催されたのではなく、大名間の接待饗応の具として大いに利用していたようである。従前の『太平記』の享受のなされ方からみてこうした大名達は『太平記』と無縁の人ではなかったろうし、理尽抄講釈と縁深い人もいた。さらに、この人達の浄瑠璃歌舞伎への愛着をみる時、そこで『太平記』が流用され語られ演じられたとしても不思議なことはない。むしろ、自然な感さえする。観衆に求めるものがあったのを太平記のいろいろをもって代弁させるのも一工夫といえよう。歌舞伎では寛文

二年（一六六二）八月十六日江戸堺町鶴屋勘三郎座で「大森大狂言」が演じられており（「大和守日記」）、以後しばしば太平記物の名がみれる。少し下るが歌舞伎脚本『好色伝授』（元禄六年八月刊）に

仮初にも太平記等を読めば、武士憤りを覚え、善いとは常々申さぬ事か、既に新田義貞は名将なれども、勾当の内侍に心をかけ一生させる事もなく、敢ない死を召されたと有るではないか　（日本名著全集『歌舞伎脚本集』所収）

といったせりふがでてくる。歌舞伎でもそれ迄太平記物が上演されていて馴染み深いものであったことが示唆されると共に、これなども「事の道理は太平記」（「大経師昔暦」）式の『太平記』の受け入れ方であり、『鸚鵡ケ杣』（正徳元年刊）序にみえる竹本義太夫の「文言章段のしなによりていかなる名人もかたり得がたき事有べし堅からんとすれば太平記のごとく艶ならんとすれば源氏物語のごとく端手ならんとすれば当世好色双紙のかる口に似て各浄るりにあらす」（演劇研究会編『未刊浄瑠璃芸論集』所収）という言葉の中にみれる『太平記』に対する理解と同じものである。元来武士や公家の読書対象であった『太平記』も浄瑠璃歌舞伎の大衆性の中で次第に庶民の間に馴染み深いものとなり、慰みの世界に取り入れられるようになったことを物がたっているが、同時に物の本『太平記』の独自性は消え去りはしなかったことを示している。

おわりに

散漫ではあるが太平記読と近世初期文芸と『太平記』との関係について述べてきた。そして、太平記読の歴史を辿り『太平記』の影響ということを考えてみるに、その背後には必ずその時々における物の本『太平記』の享受があった。しかも、その読まれ方は、例え物読み法師によって慰みに読まれた場合でも、「聞三太平記一也。赤松入道円心有

軍功之事。尤為二当家名望一。聞レ之為レ幸也」（「蔭涼軒日録」文正元年閏二月六日）と、その内容と現実（或は、歴史的事実）とが結び付けられ反応されていた。新井白石は『読史余論』に『太平記』の記述を随所利用しており、室鳩巣は『駿台雑話』で楠木正成の「最後の一念を語る事はなはだ陋し」（巻之四）と評し、神沢貞幹から「太平記に倚ての評歟、但正録に此の語有リヤ」（『翁草』巻二十八）と批難されているように、史書教訓書としての読まれ方は『太平記』成立後連綿と続いている。一方、軍書としての利用も盛んであったことは、理尽抄講釈の盛行が物語っている。そして、『太平記』は「連々御所望」（「実隆公記」延徳二年六月六日）によって読まれ続けられてきた。太平記読はこのような幅広い『太平記』の享受の中で生み出されたものであり、近世以後の庶民相手の太平記読の存在も、このような背後の事象を考えずには理解できないものである。それは『平家物語』が語り物として芸能の系譜の中で語られたのとは異なり、『太平記』の持つ一級の価値が、時機に応じた幅広い享受の中で導いてきた一現象であったといえよう。謡曲・仮名草子・浄瑠璃と『太平記』との関係も、その時機における『太平記』の享受を考えずには理解できないものである。前述してきた享受のあり方を背景にしながら、『太平記』は文芸への影響を持ち続けてきたというべきであろう。そして、このことは、文芸の側からみれば、文芸自体がその時代の中で好まれる題材を意図的に選別し創作していたといえよう。それは、文芸の時代への追随の姿であり、強力な支持者への傾倒した姿であった。然も、最も庶民的な浄瑠璃・歌舞伎に迄、物の本『太平記』という上層人の時代の嗜好書が入り込みとりあげられているのをみると、文芸の世界の社会的な拡大が[29]強く感じられる。それだけに、作者自身の好み以上に、享受者の好みや時流の動きを考えた新たな文芸の展開が予想され、文芸と社会との関係が、文芸の自律という問題をからめて、一つの大きな問題として提出されてくる。この問題については、今、何も述べることはできないが、結局のところ、『太平

記』の享受を通じて近世初期文芸に現われた種々の様相は、時代と文芸の密接な結び付きを示唆するものといえよう。

注

(1) 後藤丹治著『戦記物語の研究』（S11）『太平記の研究』（S13）『中世国文学研究』（S18）

(2) 亀田純一郎「太平記読について」（『国語と国文学』S6 中世文学号）

(3) 桑田忠親氏は「物読み法師と源氏物語」（『大名と御伽衆』増補新版所収）で「純粋の僧侶でない、僧体の、物読み専門芸人のことを、物読み法師と呼び、これに対して、本職の僧侶であって、余技に物読をしているものを、物語僧と称したのではなかろうか」という見解を示され江見河原入道を物読み法師とされている。

(4) 同右『大名と御伽衆』増補新版　二六六頁

(5) 『上井覚兼日記』（『大日本古記録』）天正十一年正月廿三日
此夜月待候、読経なと終候てより、聴衆なと候儘、太平記二三巻読候

(6) 日本古典文学大系『戴恩記』（岩波書店刊）補注二四八

(7) 『戴恩記』には一華堂乗阿・宗務法橋・五十川了庵同座の記事がみえ、『太平記』を初めて版行した了庵と宗務との交友が注目される。

(8) 川瀬一馬著『増補古活字版の研究』では成簀文庫蔵の『太平記』を紹介され「之が版式上より慶長八年季春以前の刊行とすれば、了庵の碑銘に言ふ、慶長七年（壬寅）に初めて上梓された刻本に相当するものなる事は疑ひないと思ふ」「了庵は慶長七年に初めて太平記を刻し、再び明年之を新刊して世俗に便し」（同著上巻二二三～二二四頁）と述べられている。又日本古典文学大系『太平記一』解説には、慶長八年同刊記の片仮名交り十二行古活字本でも東洋文庫本と鎌田共済会本では「同刊記だから全く同じと考えられ見過ごされ易いが、実は数十個所に於て字の相違があり（例、東洋文庫本「カケ」を鎌田共済会本「駈」とする）、同じ刊記を有しながらも完全に同一とはいえない」と報告されており、『太平記』の需要の多かった程を思わせる。

(9) 松田修「日州漂泊野人の生涯」(『日本近世文学の成立』所収)

(10) 旧チャムブレン蔵書を佐佐木信綱博士が『新謡曲百番』(M45刊 博文館)として紹介

(11) 佐成謙太郎「謡曲の資材」(『能楽全書』第三巻所収) 同氏は「鱗形」「雷電」「第六天」もあげられておられるがここでは省略した。

(12) 「能本作者注文」「二百十番謳目録」「自家伝抄」「いろは作者注文」等諸書世阿弥作とする。なお、『親元日記』寛正六年二月廿八日に仙洞御所での演能記録がある。

(13) 田中允「新謡曲百番の諸問題」(『中世文学の世界』岩波書店刊所収) 同氏の調査によればこの十三番の内新謡曲百番にのみ見える曲は「大森彦七」「湊川」「幽霊楠」の三曲だけで、他の曲は新謡曲百番と同類の写本(佐野本大聖寺本吉川本彰考館本田中本として同論文で紹介)と共通曲をもつと述べられている。なお百番の成立時期編纂時期については「多くは、室町末期から江戸初期、即ち十六世紀後半から十七世紀前半にかけての間に作られたとの考え方が有力となる」「編纂の確実な年次は、佐々木博士説と変らないが、その上限を一六六六年まで下げ得る可能性の極めて強いことを附記したい」と述べられている。

(14) 小林静雄「自家伝抄の資料的価値」(『謡曲作者の研究』所収)

(15) 『甫庵太閤記』巻十六

(16) 前田利常と御伽衆の話を載せた『微妙公夜話』(『改定史籍集覧』第二十六冊所収)に「太閤様の儀咄申候時分は、太閤杯は無類成御生得と御意被ㇾ成候。信長公の儀咄申候は武勇成お人と被ㇾ仰候。越後謙信公の儀咄申節は、余程なる生付と被ㇾ仰候。楠又は信玄などの咄之有時は、ちひさくて、やくに立ぬと、御頭を度々ふり被ㇾ成候」と戦国武将と並べて楠木正成を批評している。

(17) 島津久基編著『近古小説新纂』(S3) 吉沢義則著『室町時代文学史』(S11) 野村八良著『室町時代小説論』(S13) 中古貞次著『中世小説の研究』(S30) 注(1)の後藤丹治博士の諸著書等

(18) 後藤丹治著『中世国文学研究』一一八頁

(19) 後藤丹治著『戦記物語の研究』二三一頁

(20) 市古貞次「近世初期小説の一性格」(『国語と国文学』S19・4)

(21) 田中允「歌謡作者考再論」(『国語と国文学』S17・7)
(22) 野間光辰「恨の介」解説(日本古鑑賞講座十六巻『御伽草子・仮名草子』角川書店刊)
(23) 慶長十四年七月四日五人の禁裡女房と七人の公家が姦淫の事露見し勅命により懲された事件。松田修氏はこの事件を『恨の介』成立の契機とされた(『国語国文』S30・12)が野間氏は前出の考証によって否定された。
(24) 安田富貴子「明暦萬治ごろの京都」(『古浄瑠璃正本集』第六所収)
(25) 和辻哲郎著『日本芸術史研究』一六五頁
(26) 同右　一六六頁
(27) 同右　一五九頁
(28) 守随憲治「鳥取池田藩芸能記録の発掘」(『東京大学教養学部人文科学紀要』第九輯、十三輯、十六輯)に紹介されている。数多く刊行された物の本『太平記』にも、元禄十一年には洛陽書林から絵入平仮名交りの横本体裁のものが出され、庶民の間でも読み楽しまれる契機を導いている。

(文学部助手)